

1. 活動テーマ

<テーマ>

ぼこぼこ	園名	ヒューマンアカデミー印西牧の原保育園		
	クラス	おひさま組 (2歳児)	人数	17人

<テーマ設定理由>

お絵描きが大好きな子ども達。
特に大きな模造紙にダイナミックに描くことが最近のお気に入り。
素材を変えてみたらもっと発見があるのでは？そんな問いからテーマを決定。

2. 活動スケジュール

アーティスト訪問日：①9月18日 (木) ②9月22日 (月) ③10月7日 (火)
10月22日 (水) アート活動
9:30~10:00 低月グループ
10:00~10:30 中月グループ
10:30~11:00 高月グループ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【用意したもの】

片面ダンボール(幅900mm×5m) 3mm厚、ダンボール(片面ではなく通常の物) 一人分×人数分、クレヨン

【環境設定】

- ・片面ダンボールを3等分に分けておく・床にビニールシートを敷く
- ・1人分のダンボールを用意する・低月→中月→高月の順に実施

4. 探究活動の実践

<活動内容>

- ①まずは、片面ダンボールは数かず、通常のダンボールを見せる。「これなんだか知っている？」
- ②触って感触を確かめてみる(ツルツル、サラサラ)→両面になっていて剥けることがわかる→なんとか剥いてみようとする姿(これはなんだろう?)
- ③少し飽きてきたタイミングで片面ダンボールを敷く→子ども達の目が輝く(なんだこれ?!)→ぼこぼこした面に触れてみる(ざらざら、でこぼこ)→クレヨン投入
- ④クレヨンで描いてみる→大きなキャンパスと捉えて絵を描く子、溝を塗ってみる子、足にクレヨンを塗りダンボールにこすって色を付ける子(大人はそれぞれの発見の瞬間の目撃者となる)
- ⑤一人用のダンボールを併用して遊び始める(くるくる巻いてみる、雑巾がけのようにこする、丸めて中に入れる、心行くまで巻いてみるetc…)

<活動中のこどもの姿・声、こども同士や保育者との関わり>

①ダンボールに興味を持った子ども達。これ何か知っている?の問いに、「ダンボール!」と言葉で答えたのは高月グループのみだったが、先生が、保育園に宅急便屋さんが四角い箱持ってきてくれるよね?と話す、みんな、あ、あれか!と納得の様子。
ひとしきりツルツルの感触を確かめてから、アーティストが、ペロっと少し剥いて見せると、子ども達の顔がアッ!となり、中を覗いて剥がし始めた。集中力が途切れることなく、皆が夢中で取り組んでいた。

②少し集中力が欠けてきたところで、クレヨンを投入。子ども達の目がキラリと光り、皆吸い寄せられるようにクレヨンに集まり、お絵描きが始まった。Aちゃんが、青いクレヨンで大きな円を描き「ふね!」と言。そして、その下に1本線を引き、「うみ!」と満面の笑みで伝えてくれた。片面ダンボールのぼこぼこの溝にクレヨンがフィットすると、濃く色が出ることを発見したCちゃん。夢中になって何度も何度も溝に沿って縦に往復させていたが、ふいに横に逸れ、そのまま横になっても上手く色がのらないことに気づき、また縦の溝に戻って色塗りの続きを始めた。遊びの中から自然に物の法則について学んでいる姿があった。お絵描きしたダンボールの上を歩いてみたD君。すると、足に色が付いているのと、ダンボールに描いた部分がこすれていることを発見!今度は自分の足にクレヨンを塗り始め、色のこすれ具合や自分の足の色を確かめながらダンボールの上を歩いていた。

③最初に使用した一人分のダンボールを、雑巾がけのように滑らせ遊び始めたSちゃん。最近、クラスで雑巾がけごっこをしていて、ダンボールの形状がそれと似ていたため、繋がったようだ。保育士が、ダンボールをクルクルと丸めて筆のようにして片面ダンボールに絵を描き始めた。それを見た子ども達は、その手もあつたか!と言わんばかりに瞬間に遊びが伝染し、双眼鏡にする子、巻きずしにして包丁で切る真似をして遊ぶ子など、遊びの発展の瞬間を目撃した。子ども達の集中は予想をはるかに超えるものとなった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た保育士の気づき>

- ・全編動画撮影を行ったため、各グループの様子や伝えたい場面がクラス全体に的確に共有ができたこと、自分の振り返りたい場面を確認できたことにより有意義な振り返りを行うことができた。
- ・各月齢のグループによって、同じ活動内容でも興味を持つ対象が違ったり、遊び方が異なる事がわかり非常に興味深かった。(低月は対象に対してこれは何だろう?という問いに純粋に向き合い遊ぶ、中月は、好奇心旺盛の子が多く、友達の様子を見て真似してみるなどの遊び方、高月は、それぞれに興味がある物を見つけて集中して取り組む様子)
- ・保育士の少しの関わりで、子どもの遊びが爆発的に発展することを実感した。どこまで介入して良いのか、(子どもの探求心を阻害しない領域)については課題点として検討していく。

2025年度 探究活動 報告書



1. 活動テーマ

<テーマ>

かげみーつけた！	園名	ヒューマンアカデミー印西牧の原保育園		
	クラス	おひさま組 (2歳児)	人数	15名

<テーマ設定理由>

最近のおひさま組の子どもたちが夢中になっている遊びは、宝探しです。「よく見て探してほしい」という保育者の願いと、好奇心いっぱいに次を探す子どもたちの姿の双方の思いが、活動をより豊かなものにしていただけました。
この経験から、光と影の性質を利用して「物の多面的な表情」を発見する影遊びの活動を設定しました。

2. 活動スケジュール

アーティスト訪問日：①2月3日（木）

2月17日（火）アート活動

9:45～10:15 低月グループ+高月グループ数名

10:30～11:15 中月グループ+高月グループ数名

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【用意したもの】

素材：・ブラダンボール（ナチュラル）90x180程度 2枚 ・セロファン（カラー）20枚程度

・ペットボトル 大中小各数本 ・園にある廃材やおもちゃ（スライム・乾パスタ・枝） 道具 ・テーブル 2台 ・プロジェクター 1台 ・懐中電灯 1～2本 ・円型ライト 2つ ・養生テープ（ブラダンボールを壁に貼る）

【環境設定】

・ブラダンボール1枚を投影用スクリーンとして壁に貼る。もう1枚は床に立てかけてスクリーンにする。・机に廃材などの材料を並べておく、懐中電灯なども子どもが自由に手に取れるようにしておく（1巡目実施の時に皆が懐中電灯を持ちたくて順番待ちになってしまったため、急遽人数分用意、2巡目は一人1本持って活動できた）

4. 探究活動の実践

<活動内容>

①導入：なんだろうBOXの中に手を入れて、何が取れるかワクワクしながら探して触ってみる。※なんだろうBOXの中身は普段遊んでいる玩具数種類。まるで新しい玩具に出会ったような表情で喜ぶ姿があった。

②2グループに分けて実施

③部屋を暗くして主活動に入る。普段とは違う雰囲気子ども達の気持ちが高ぶる様子が見られた。スクリーンに物や自分を映す、懐中電灯を使って光を発見する、様々な素材に光を当ててみるなど

<活動中のこどもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

①プロジェクター、スクリーンに興味を持つ子ども達が集まってくる。スクリーンの前で自分の影を感じてみる。○や動物の形を映しだしてみる。近づけ方によって、影が大きくなったり小さくなったりすることを発見。「先生はできないなあ。どうやってやるの？」との声かけに、「わたしにまかせて！」と自信满满に教えようとする姿があった。先生が、○と△を合わせて「アイスクリーム！」とスクリーンに映して遊んでいると、映っている影のアイスを舐める動作をして、一緒に楽しむ様子があった。→大人と子どもの学びの協働

②懐中電灯を初めて触った子がほとんどで、スイッチを入れると光が出現することに興味津々の様子。天井に自分のライトの光が映っていることを発見。「みてみて！」

光が動く様子が面白く、光を追いかけていると、一人の子が「おぼけを探そう！」と友達に話しかけ、お化け探しに発展。最近ブームの宝探しから発想を得た模様。

懐中電灯のライトに様々な色のセロファンをかぶせ、セロファンの色の光が出現することを発見。その様子を見て真似てみる子もいた。

③ペットボトルにセロファンを載せライトを当ててみる、テーブルにある木の枝、マカロニ、スライムなどの素材をライトテーブルに持っていく光を当ててみたり、セロファンを重ねて違う色になることを発見している子もいた。

活動の趣旨から外れて素材で遊び始めてしまう子がいる懸念があったが、素材単体のみに興味を示す子がいなかった。

④途中で飽きて違う遊びに向かう子も誰もおらず、想定時間よりも延長して行った。光と影の発見に子ども達が夢中になって取り組んだ活動となった。



5. 振り返り<振り返りによって得た保育士の気づき>

・通常は月齢毎のグループ分けだが、今回は高月グループの担任が休みだったこと、登園人数が少なかったこともあり、高月の園児を2グループに分けて配属した。このことで、高月の園児の発見に低月、中月の園児が触発されてより活動的になっていたことが新たな発見となった。

・30分想定だったが、もういい、という発言や飽きて違う遊びに移行する子が誰もおらず集中して遊ぶ様子が驚きだった。

・特にやり方を見せなくても、子ども達自ら「やってみよう！」という気持ちそのままに行動している様子を目の当たりにして、子ども達の創造力に驚いた。

・保育士が問いをもったり楽しんで遊ぶことで、一緒になせよう？という問いに子どもと一緒に取り組み学びを深めていけると感じた。